

象形文字ルウィ語の疑問文について

大 城 光 正

1. はじめに

象形文字ルウィ語にも数的には多くないが、疑問文を確認することができる。一般に、疑問文には、真偽疑問文(yes-or-no questions、又は sentence questions)と疑問詞疑問文(interrogative questions)に大別されるが、象形文字ルウィ語の真偽疑問文は、英語のように主語と動詞/助動詞の倒置や疑問符の付加もなく、文脈の解釈から決定することになる¹⁾。また、真偽疑問文では「yes」や「no」の表出はなく、その質問に対して肯定か否定の陳述が表出されるのみである。疑問詞疑問文では、疑問詞の語形が関係代名詞と同一語形をとるので、文脈の分析によって両者の類別を行う必要がある(Plöchl;Payne)。また、疑問詞疑問文の中には、同構文が従属節として主節に後続する間接疑問文である場合もある。さらに、相手に返答を求めるのではなく、話者の気持ちを反語的に表現するために疑問構文をとる修辞疑問文(rhetorical questions)も指摘される。そこで本稿では、象形文字ルウィ語に散見される疑問構文を全て抽出して、同言語の疑問構文の表出傾向を探ってみたいと思う。特に、ヒッタイト語の疑問文に関する先行研究では、Friedrich(1960)、Mascheroni(1980)、Hoffner(1995)の考察があるが、象形文字ルウィ語の疑問文に関する先行研究は皆無といえる。それ故、本稿において、象形文字ルウィ語の疑問表現を全て例示することは、同言語のみならず、他のアナトリア諸語との比較研究の観点からも有益なものと思われる。なお、以下に例示される疑問文の用例は、象形文字ルウィ語碑文研究の第一人者であるロンドン大学名誉教授の Hawkins(2000)の翻字翻訳において、疑問文として訳出されたものを検証して疑問文の用例として引用する²⁾。

2. 真偽疑問文について

そこで、まず象形文字ルウィ語の真偽疑問文を例示してみたい。同言語における真偽疑問文の用例は僅か9例である。その中で修辞的疑問文ではなく、相手に質問を投げかける真偽疑問文といえる用例(疑問文例はゴシック太字で明示)は以下の唯一例である。

(1) ASSUR f, 4 § 22-24:

§ 22 u-nu-pa-wa/i-tu-u (ASINUS₂. ANIMAL) tara/i-ka-sa-ni-sa REL-ri+i
a-sa-ti

§ 23 wa/i-mu-u VIA-wa/i-ni

§ 24 **a-wa/i-wa/i** ("PES₂") **pa+ra/i-ri+i** **ARHA** ("PES₂") **a+ra/i-wa/i**

§ 22 「ところで(unu)、汝のもとに(-tu)ラバが(tarkasnis)いる(asati)ならば(REL-ri)、

§ 23 私のもとに(-mu) [それを]送ринаさい(VIA-wani)。

§ 24 さもなければ(awi)、私が歩いて(parari < *patati) 出向きましょうか(**ARHA**
arawi)。」

上記例はアッシュール書簡文書からの引用である。象形文字ルウィ語碑文の中で、送り相手への依頼や問いかけ等の文意が表出されているのは、アッシュール書簡文書からの用例が大半であり、同書簡文書以外では、ボイベイプナル文書(BOYBEYPINARI)とアクサライ文書(AKSARAY)の僅か2例のみである。上記例(1)では相手への命令依頼文の後続文として、その依頼が実現不可能な場合の申し出の疑問構文になっている。

さらに、真偽疑問文の中で、送り主側の反語的な修辭的疑問文といえる用例は以下の8例である。

(2) ASSUR e, 1 § 2-6:

§ 2 sa-pi-su+ra/i-wa/i-a-ti

§ 3 u-sa-ta-mu-ti-sà-ha-wa/i ha-tu+ra/i

§ 4 **a-zu-za-ha-wa/i-za á-pi** ha-tu-ra+a

§ 5 wa/i-za NEG₂ REL-i-ha ha-tu+ra/i-na ha-tu-ra+a

§ 6 wa/i-ma-za u-zu-za ha-tu-ra+a a-sa-ta-ni

§ 2 「汝は(-ti)健やかなことでしょう(sapisur)。

§ 3 さて(-wa)、汝は手紙について(haturi)誤解をしています(usatamutis)。

§ 4 我々(a(n) zu(n) za)自身が(-(n) za)手紙を送り返すべきですか(api hatura)。

§ 5 我々が(-(n) za)手紙を(haturan)書き送る(hatura)のではなく(NEG REL-ha)、

§ 6 汝ら(u(n) zu(n) za)自身が(-ma(n) za)手紙を書き送るべきでしょう(hatura
asatani)。」

上記文は修辭的疑問文(§ 4)に対する反意的な応答文が後続文(§ 5 と § 6)に表出されている例である。なお、後続文に対応する応答文が省略されているアッシュール書簡文書からの用例は以下のとおりである。

(3) ASSUR a 1 § 2-5:

§ 2 sa-na-wa/i+ra/i PUGNUS. PUGNUS-si

§ 3 a-zu-za-ha-wa/i-za á-pi ha-tu-ra+a

§ 4 u-nu-ha-wa/i-tu-u-ta u-za-ri+i ARHA pa+ra/i-ra+a-ha

§ 5 wa/i-mu ha-tu+ra/i-na NEG₂ ma-nu-ha ("LOQUI")pu-pa-la-ta

§ 2 「汝らは健やかに (sanawari) お越しのことでしょう (PUGNUS. PUGNUS-si)。

§ 3 我々 (a(n) zu(n) za) 自身が (- (n) za) 手紙を書き送るべきですか (api hatura)。

(> 「いえいえ、汝が我々に書き送るべきでしょう。」)

§ 4 この度 (unu) 私は汝らに (u(n) zari < *unzati) 失望しました (ARHA pa(r) raha)。

§ 5 汝は私に (-mu) 手紙を (haturan) 一度も届けて (pupalata) いません (NEG manuha)。」

上記の文意からも、(§ 3) a-zu-za-ha-wa/i-za á-pi ha-tu-ra+a 「我々自身が手紙を書き送るべきですか。」の疑問文は、単に真偽を相手に問うための疑問構文ではなく、後続文 (§ 5) の内容からも推察されるように、「我々が手紙を書き送るべきですか。」 > 「いえいえ、我々が書き送るべきではなく、汝が我々に書き送るべきでしょう。」という反意表現を含意する修辭的疑問文である。同様に後続文において反意的な修辭疑問文を明示している用例が以下のとおりである。

(4) ASSUR a 2-3 § 5-7 (=用例(11)):

§ 5 wa/i-mu ha-tu+ra/i-na NEG₂ ma-nu-ha ("LOQUI")pu-pa-la-ta

§ 6 NEG₂-a-wa/i tara/i-pa-mi-i-sa za-na a-pa-ha ("PES₂")a+ra/i-ta
ka+ra/i-mi-sà (URBS)

§ 7 (*205) á-tu-ni-na-wa/i-mu REL-za NEG₂ ma-nu-ha VIA-wa/i-ni-ta

§ 5 「汝は私に (-mu) 手紙を (haturan) 一度も届けて (pupalata) いません (NEG₂ manuha)。

§ 6 タルパミは (tarpamis) 時々 (zan apa(n)) カルケミシュに (Kar (ka) misa) やって来なかったのですか (NEG-wa arata)。」 (> 「彼はやって来たでしょう。」)

§ 7 それならば、なぜ (REL-za) 汝は私に (-mu) ATURI を (aturin) 全く (manuha) 送って来なかったのですか (NEG₂ VIA-wanita) 。」

以下のアッシュール書簡文書の用例(用例(5)～用例(8))は、送り主側自らが手紙を書き送るべきものではなく、相手側から書き送るべきことを修辭疑問文として表出している用例である。

(5) ASSUR b 1 § 3:

§ 3 á-mu-ha-wa/i-mu á-pi ha-tu-ra+a

§ 3 「私 (amu) 自身が (-mu) 手紙を書き送るべきですか (api hatura)。」 (> 「私ではなく、
汝が私に書き送るべきでしょう。」)

(6) ASSUR c, 1 § 2:

§ 2 á-pi-wa/i-za ha-tu-ra+a

§ 2 「我々自身が (-(n)za) 手紙を書き送るべきですか (api hatura)。」 (> 「我々では
なく、汝(ら)が書き送るべきでしょう。」)

(7) ASSUR d, 1 § 4:

§ 4 á-zu-za-ha-wa/i-za á-pi ha-tu-ra+a

§ 4 「我々 (a(n) zu(n) za) 自身が (-(n)za) 手紙を書き送るべきですか (api hatura)。」
(> 「我々ではなく、汝(ら)が書き送るべきでしょう。」)

同類例として、ASSUR f, 1 § 3。

(8) ASSUR e, 1 § 8:

§ 8 wa/i-za á-pi a-zu-za-ha ha-tu-ra/i

§ 8 「我々 (a(n) zu(n) za) 自身が (-(n)za) 手紙を書き送るべきですか (api hatura)。」
(> 「我々ではなく、汝(ら)が書き送るべきでしょう。」)

3. 疑問詞疑問文について

次に、象形文字ルウィ語の疑問詞疑問文を考えてみよう。同言語における疑問詞疑問文の用例は僅か9例である。その中で修辭的疑問文ではなく、相手に質問を投げかける疑問詞疑問文といえる用例は以下の5例である。全てアッシューール書簡文書からの用例であり、書簡における送り主側の一方的な問いかけの形式である。

(9) ASSUR e, 2 § 11:

§ 11 REL-i-sà-wa/i-sa á-mi-sa ha-tu-⟨rat+⟩a-sa

§ 11 「私の (amis) 手紙 (haturas)、それは (-as) 一体何ですか (REL-is)。」

(10) ASSUR f, 2 § 9:

§ 9 REL-sà-wa/i-sa á-zi-sa ha-tu-ra+a-sa

§ 9 「我々の (a(n) zis) 手紙 (haturas)、それは (-as) 一体何ですか (REL-is)。」³⁾

(11) ASSUR a, 2-3 § 5-7 (=用例(4)):

§ 5 wa/i-mu ha-tu+ra/i-na NEG₂ ma-nu-ha ("LOQUI")pu-pa-la-ta

§ 6 NEG₂-a-wa/i tara/i-pa-mi-i-sa za-na a-pa-ha ("PES₂")a+ra/i-ta
ka+ra/i-mi-sà (URBS)

§ 7 (*205) á-tu-ni-na-wa/i-mu REL-za NEG₂ ma-nu-ha VIA-wa/i-ni-ta

§ 5 「汝は私に(-mu)手紙を(haturan)一度も届けて(pupalata)いません(NEG₂manuha)。

§ 6 タルパミは(tarpamis)時々(zan apa(n))カルケミシュに(Kar(ka)misa)やって
来なかったのですか(NEG-wa arata)。

§ 7 それならば、なぜ(REL-za)汝は私に(-mu)ATURIを(aturin)全く(manuha)送って
来なかったのですか(NEG₂ VIA-wanita)。」

(12) ASSUR c, 2 § 6-7:

§ 6 á-pi-ha-wa/i-mu-ta NEG₂ REL-ha-na u-si-ti-sa

§ 7 wa/i-mu-ta *187(-)tu-wa/i-i-za REL-za u-si-ti-sà

§ 6 「汝は私に(-mu)何も持って(usitis)こない(NEG₂ REL-han)というのに、

§ 7 なぜ(REL-za)汝は私に(-mu)TUWI(N)ZAは持ってくるのですか(usitis)。」

(13) ASSUR f, 4 § 27:

§ 27 á-pi-ha-wa/i-za (*420)wa/i-sa-ha-sa REL-za VIA-wa/i-ni-ta

§ 27 「さらに(apiha)、なぜ(REL-za)彼らはWASHASAを我々に(-(n)za)送ったのですか
(VIA-wanita)。」

さらに、疑問詞疑問文の中で、自問自答の疑問構文(用例(14))や反語的な修辭的疑問文(用例(15), (16))は以下のとおりである。

(14) ASSUR g, 2 § 48-49:

§ 48 a-wa/i-wa/i-za PANIS-ni-na NEG₂ a-sa-ti

§ 49 REL-sà-wa/i-za pi-i[a-...] ha+ra/i-na?...

§ 48 「さてさて(awa)、我々のもとは(-(n)za)パンが(PANIS-nin)ありません(asati)。

§ 49 一体誰が(REL-sa)我々に(-(n)za)HARNAIを与えてくれるというのですか
(piyai)。(> 「誰も私に HARNAI を与えてはくれない。」)

(15) AKSARAY 5 § 7-9:

§ 7 REL-sà-ha-wa/i-mu-u za-[...] LOCUS-ta₅-za pi-ia-i

§ 8 (DEUS)TONITRUS-hú-za-sá-pa-wa/i-na na REL-ti-ha_x pi-ia-ta

§ 9 wa/i-na á-mu ki-ia-ki-ia-ia IUDEX-ni REX-ti(-)x pi-ia-tá

- § 7 「誰が (REL-s) 私に (-mu) この地を (za.. LOCUS-taza) 与えてくれるというのですか (piyai)。 (> 「誰も与えてはくれない。」)
- § 8 タルフント神は (TONITRUS-s) それを (-an) 誰にも (REL-tiha) 与えてくれなかったが (na piyata)、
- § 9 統治者で (IUDEX-ni) 王でもある (REX-tis) 私 (amu) キヤキヤには (Kiyakiya) それを (-an) 与えてくれました (piyata)。」

(16) ASSUR e 2 § 9:

- § 9 ni-pa-wa/i-na á-mu **REL-za** i-zi-ia-wa/i á-mi-na za-na ha-tu+ra/i-na
- § 9 「または (nipawa)、なぜ (REL-za) 私が (amu) 私の (amin) この (zan) 手紙を (haturan) 作るのですか (iziyawi)。」 (> 「私が作成することはないでしょう。」)

また、疑問詞構文における間接疑問文の用例としては、明確な文意は不明であるが、ポイベイプナル碑文に唯一例確認される。

(17) BOYBEYPINARI 2 IVD 1 § 4:

- § 4 a-wa/i LITUUS+na-ti-sa hu-pi-tà-ta-tà-ti-wa/i **REL-a-ti**
sà-ka-tá-li-sà-wa/i
- § 4 「汝は理解するだろう (LITUUS-natis)、いかに (REL-ati) HUPITATATA を私が SAKTALISA-するかを。」

4. おわりに

現在のところ、象形文字ルウィ語における疑問構文は総計 18 例である。その中で、真偽疑問文の用例が 9 例 (真偽疑問文が 1 例、修辭疑問文が 8 例)、疑問詞疑問文の用例が 9 例 (一般の疑問詞疑問文が 5 例、修辭疑問文が 3 例、間接疑問文が 1 例) である。象形文字ルウィ語碑文に疑問文の形式が多く認められない理由は象形文字ルウィ語碑文自体のジャンルにあると思われる。疑問形式が相手側に何らかの情報を問い合わせる表現形式であるのに対して、象形文字ルウィ語碑文の大半が国王や高官による記念碑文の体裁であるので、問い合わせ形式の表出が非常に限定されるからである。それ故、上記の用例のように、象形文字ルウィ語の疑問文の大半は相手側への問合せや質問の形式がみられるアッシュール書簡文書で占められ、しかも相手側への感情的な不満の気持ちを含意する修辭疑問文が散見される。

注

- 1) アッカド語の疑問文表記では、書記が末尾の表現形式として、同一母音の繰り返し表記(盈記法 *plene writing*)が使用される。ヒッタイト語にはこの表記はほとんど確認できないが、Hoffner(1995:88)は唯一例として、*nuki-is-sa-an A-WA-A-ATA-BI-IA ar-ha-a-an har-te-ni-i* 「このように汝らは私の父の言葉を限界であると捉えるのですか?」(古期文書 KBo 22.1, 30-31)を挙げている。つまり、この用例中の末尾の *har-te-ni-i* は、動詞 *har(k)*-「持つ、保つ」の2人称複数現在形 *har(k)teni* であり、末尾の音節文字 *-ni* の母音 *-i* をさらに単独表記で繰り返す盈記法で、疑問文のイントネーション表記と解釈している。
- 2) 象形文字ルウィ語碑文の中の疑問文の抽出は今後の同構文研究における基本的な資料としての貢献も考慮して、Oshiro(1988a;1988b;2000);Hawkins(2000)の解釈を採用する。なお、Hawkinsによる翻字の中で記入されている *space filler* [- '] は文脈分析上は必要不可欠な表示ではないので本稿では省略する。
- 3) 「手紙」の単数主格形 *ha-tu-ra+a-sa*(**haturas*)の表記から「手紙」を意味する名詞形を *a*-語幹名詞 *hatura-*と措定する。

参考文献

- Friedrich, J. (1960), *Hethitisches Elementarbuch I*, Heidelberg.
- Hawkins, J.D. (2000) *Corpus of Hieroglyphic Luwian Inscriptions*, Vol. I. Berlin.
- Hoffner, H.A. (1995) "About Questions", *Studio Historiae Ardens (Festschrift for Philo H.J. Houwink ten Cate*, Istanbul, 87-104.
- Mascheroni, L. (1980) "Il modulo interrogativo in eteo I", *Studi Micenei ed Egeo-Anatolici* 22, 53-62.
- Melchert, H.C. (2003) *The Luwians*, Leiden.
- Oshiro, T. (1988a) "*api* in Hieroglyphic Luwian", *Archiv Orientalni*, 246-252.
- (1988b) "The Relative Conjunctions in Hieroglyphic Luwian", *Journal of Indo-European Studies*, 9-21.
- (2000) "Hieroglyphic Luwian *tuwati* and *u(n)zati*", *The Asia Minor Connexion: Studies on the Pre-Greek Languages in Memory of Charles Carter*, Louvain, 189-193.
- Payne, A. (2004) *Hieroglyphic Luwian*, Wiesbaden.
- Plöchl, R. (2003) *Einführung ins Hieroglyphen-Luwische*, Dresden.